

己を知ったならば 全てのものが解ってくる。

吾々は六根ばかり頼ってはいけない、仏教では六根清浄などというが、六根というものは、この顕界において、この明るい世界を眺めるために肉体にそなえたものである。

しかし物質の世界を見るにつけても、やはり六根の道をきれいに掃除しておかなければならない、つまったら雑音だけ入ってくる、雑音が流れ込んでくると、六根はことごとく悪い方に走ってしまう。

つまり世を乱すことになる、この世を乱すことが一番罪悪になる、心を磨いて本当に、六根の働きをば融通の変えやすいように、つまり魂の道を明らかにしておいたらよい、そうすると六根は光となって、現れてくる、六根が光を放ってくるというのと、やるのが、みな、魂比礼振りということになってくる、己がものを生み出すようになる、外からのことも、内からのことも相交流していれることになる、外のことは、皆、己のことということが、はっきり解ってくる。

それで合氣道なんか、ことに稽古のうちに、固く固定していないからして、丁度いうなればこういうことになる。

月日は合氣なりし橋の上大海原は山彦の道

また、宇宙の響きのなかの空に生み出して行く、五十音、七十五声の音のひびきのなかに技は生まれてくる、つまりいうと、空に生み出して行くところの考えをもって稽古に精進してもらいたい、丁度いうと、吾々の大御親、愛の大精神は、最初”ス”.. 声ができたとっておりますが、すなわち

日の御親七十五を生み出して

合氣の道おしえたまえり

こまことは、ことごとく、七十五をもって技が生み出てくることを指している、自己という造化器官があるからうみでてくるのであるが、この自己の造化器官は自由に世の中のご経綸の営みに御奉公できる。

物事を、己の立場からみたら、まず、人々は、皆、私の家族であると感ずる、己の行ははこの家族に教えるものでなく、皆に行うものである、そうして行って、すべての人々を護り、あらゆるものを譲って行かなくてはならぬと考えている、これは、これは己というものを先に知ったならば、すべてのものが解ってくる、すなわち己というものは全大宇宙の全てのものがあるから、己というものが存在する、また己の本能もはっきりすることもできる、それから己の使命の仕事もできる、これからは私一人でできるものではない、全大宇宙があればこそできるのである、この境地と己の関係を知らないといけない。

人というものは、造化器官であることを知り、全大宇宙とは同じものであるということを知らなくてははいけない、この宇宙内の子として、宗教家というならば神の御子としての努めを、この世の中に充分つくさなければいけない、それはすべて世の中を乱さないようにするためでもある、それですべての物を譲って行かなければいけない、これは必ず行わなくてははいけない、そして、万類万象を生かして生かしていかなくてはならない。

この合氣道は精神、精神の万と、つまり全大宇宙のおおきな生命であるところの営みの道、ご経綸の姿、すなわち大宇宙の生命より、小は禽獣虫魚に至までの物も、そのことを得さしめる道であり、それを明示する道である。

六根とは 眼・鼻・耳・舌・身・意のこと。

比礼振りとは 波動・振動

合氣道開祖 植芝盛平翁 昭和35年10月